奈良 いのちの電話

2015 夏 第361号

社会福祉法人　奈良いのちの電話協会
事務局／〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27
TEL：0742-35-0500
FAX：0742-35-0533
e-mail：nid@nara-inochi.jp

特集

続『いのちの電話』の在り方を再考する

みんな おともだちだよ

夏の心　画・おがわまな

風鐸

「早起きは三文の得」といわれますが、私もそのことを実感することがあります。早朝5時から行なわれる行事に参加した日がそうです。前日は深酒せず、早めに就寝。すでに健康への第一歩といえます。帰宅してから犬の散歩・朝食・朝刊に目を通すなど、余裕をもって仕事へのウォーミングアップができます。

ところで人生を変える手段が二つあるそうです。（気軽に読んでください）一つが「時間の使い方を変える」で、もうひとつが「つきあう人を変える」だそうです。確かに早寝早起きを習慣化させると心身ともに健康になり、幸せになれそうです。では果たして「つきあう人」を変えることなどできるのでしょうか?

取引先・知人・友人・家族・・・これらの人との出会いは自然・偶然というほかありません。となると変えられるのは「つきあい方」しかありません。世間に色々なタイプの人がいるのは当たり前のことと考え、これらの人と丁寧に、真摯に向かい合うことが大切なのだと思います。　（樹）

設立35周年記念特集

続『いのちの電話』の在り方を再考する

今年4月から2年間、協会を牽引する理事長、副理事長、常務理事の三役がこれからの抱負を語り合った。また、前回の「春号」で、設立35周年記念特集「『いのちの電話』の在り方を再考する」と題して「無休性」「匿名性」「支持性」について考えたが、今回は4つめの基本テーマである「無償性」についても語り合った。

（左から三木、小林、森岡、谷口、中谷の各氏）

小林 茂樹 理事長 （三和住宅株式会社 代表取締役会長）
三木 善彦 副理事長（帝塚山大学名誉教授）
森岡 正宏 副理事長（NPO法人 きみかげの森 理事長）
谷口 宗男 副理事長（奈良交通株式会社 代表取締役社長）
中谷 博幸 常務理事（協会事務局長）

三役の抱負

○ 課題は必ず乗り越えられる

小林　4年間、理事長と運営委員長を務めてきましたが、協会の課題を解決するより拡大しているように思って反省しています。また、資金会員や相談員の減少問題も、何とか乗り越えていかければならないと思っています。住宅の場合、15年に1回大きなリフォームをした方が良いといわれていますが、基礎がしっかりしていれば50年、100年もつのと同じように、奈良いのちの電話は先輩の方々の蓄積によって、基礎はしっかりしているのでこの課題は必ず乗り越えられると思っています。

三木　ボランティア活動は、人との繋がりで入っていくことが多いと思います。私の場合、養成講座の講師を務めていたときに協会の人たちの情熱を目の当たりにして感動し、いろいろな活動に参加するようになりました。いのちの電話に参加している人たちの情熱は大きな財産です。専門分野が臨床心理ということで、認定と倫理の委員長も務めていますので、できるだけのことをしたいと思っています。

森岡　私も皆さんが一生懸命やっているのを見て応援しようと思いました。10年前にこの会館を建てるに当たり、東京で当時の厚生省に補助金の申請をお願いに行ったとき、担当の方から「奈良いのちの電話は本当によくやっている」と評価していただいたことを今もよく覚えています。

谷口　初代理事長の今里英三さんが、奈良いのちの電話を熱心に支援されていたことは聞いていましたが、具体的な活動についてはほとんど知りませんでした。今回、副理事長と財務委員長を引き受けることになりましたが、資料を見るとなかなか厳しい内容です。しかし、過去の蓄積のお蔭で1年、2年で蓄えがなくなるということはないので、企業経営に携わる者としては、今のうちに収支を整え、次の再生産ができるように改善を図りたいと思っています。そのためには、賛同者を増やすことが必要です。

○ 賛同者はネットワークを生かして

森岡　子育て支援委員長も務めていますが、いま、親子の繋がりや家庭と地域の繋がりが希薄になっています。そこで、親子のふれ合いの場として「子育てミニイベント」を毎年開いて、今年も協会が地域の一員となれるような企画を考えています。

三木　いのちの電話の活動をもっと多くの人に知ってもらうためには、外にでるイベントは効果的です。電話相談は担当できないけれど、子育ての講演や子ども対象の遊びなどのイベントなら参加できるという人もいますから…。

森岡　奈良いのちの電話には、優れた技能を持った人や幅広いネットワークがあり、これらを生かすことにより新たな展開が生まれるはずです。多彩な講師陣に協力していただき、一般の人も聴講できる公開講座や、コンサートなどを実施すれば確実に理解者が増えると思います。

小林　今まで、あまり協会に関心を持ってもらえなかった人たちに、もっと参加してもらえる機会を作って、輪を大きくしていくことが大切です。

中谷　相談電話件数が減少したというものの、昨年の件数は2万件を超えており、社会的な存在意義は計り知れないものがあります。今後は、さらに工夫をして奈良いのちの電話をより多くの人に知ってもらい、資金会員と相談員養成講座の受講生を増やす施策を着実に実施していきます。これが、協会の将来を方向づける喫緊の課題と考えています。

無償性の意味を追って

小林　いのちの電話相談活動がなぜ無償なのかを考えるとき、相談者の側に立ち相談者の気持ちに近づくためには、有償の仕事として何かを教えるというスタンスではなく、無償で心の悩みを持っている人たちと同じ側に立つ方が受け入れてもらいやすいでしょう。それに、自主的な無償ボランティアのほうが、自分の持っている時間を活用しながら相談者の悩みを聴けるのではないでしょうか。その方が電話をかける人にとっても敷居は低いし、相談しやすいと思います。

○ お金に代えられない報酬と喜び

三木　社会的使命を担って労力奉仕をする相談員には、現代人が直面している問題を解決するヒントを得たり、人の話を聴く技能や態度が身につきます。また、活動を通して新しい仲間ができ、生きがいを発見するなど、お金に代えられない報酬は大きいと思います。そうでなければ何年も、何十年も続けられません。

森岡　私もボランティア活動をしている人たちや、奉仕活動をしている人たちを多く見てきましたが、そのような活動をしている人たちの顔を見ていると、自分が与えたことによって、相手から素晴らしい笑顔をもらっている。それが奉仕活動をしている人の喜びだと思います。

谷口　金銭的にはなるほど無償であっても、何かが返されている、あるいは結果として得ているものがある。そういうことを意識していなくても、ボランティアをされている人たちはそれを感じられているのではないでしょうか。

○ 無償ボランティアの誇り

谷口　驚いたのは、相談員になっていただくために開かれている養成講座で受講料をもらっていることです。無償ボランティアをするためにお金を払ってもらっている。これは、レベルの高い講座の提供があるからでしょうし、それだから、あとの無償ボランティアが続くのかも知れません。鍛えてもらったから、返すことができるということでしょうか。

中谷　無償奉仕にも関わらず長年にわたり続けていただいている相談員の皆さんには心から感謝しています。また、協会は同じく無償で奉仕していただいている理事や評議員、各委員会の委員の皆さんによっても支えられています。

　電話相談が市民活動として始まったころは、どれだけ役に立つものか知られていなかったのですが、今では社会になくてはならない大切なボランティア活動として認められています。無償ボランティアであることに誇りをもって活動を続けたいと思います。

小林　これからも地域と一体となり、社会に貢献する協会になるよう努めて参ります。今日は、ご多忙のところありがとうございました。

情報化社会のなかで考える

出会い ①

── 出会いは宝物 ──

植村圭子

「いのちの電話」に関わってかれこれ40年近くなる。この間、“一期一会”・“一回限りの縁”を大切にすることを信条にする相談窓口での人々との出会いは、数えきれない。また、活動趣旨に賛同して寄り、集うボランティア会員の方々との出会いも加えると、私の後半の人生には、思いがけなく多彩な世界が広がっている。

いま、私たちは、地球上の大気までも取り込む勢いで縦横無尽にはりめぐらされた情報網のなかで暮らしている。人間の知恵比べが結集した「知りたがり集積機器」の開発は、「IT時代」「情報化社会」という言葉でひとくくりされるまで、私たちの生活に深く浸透している。地球上の出来事はリアルタイムで伝えられ、そして、瞬時に忘れ去られている。次々と押し寄せる情報の大波小波は、暮らしという大海の流れのなかで、その功罪にあいまみれながらも、藻屑となり絶えず彼方へと押し流されていく。

そして、いま、その流れのなかで由々しい出来事として話題になっているのが、人と人との関係も同じような傾向になっているということである。スマホで知り合う人の数を誇りあう。メルアドがどれだけ手元にあるかを競い合う。ラインの仲間関係を友情と呼ぶ。見知らぬ者同士でも共通の場に群れるだけで親友と思う。実は心の底では、痛いほど真に分かり合える仲間を求めているくせに、互いの匂いも汗もものともせずに触れ合うことは避ける。一定の距離を空けてしか出会わない関わり方をマナーとするような人間関係づくりが王道化している。

そんな時代のなかでも、人間とは、自分の生き様の師を出会いから得たいと何時も願っているものではなかろうか。私事で恐縮だが、私自身のつたない人生経験のなかでも自分が生きる依り代にして生涯忘れられない人が一定数いる。それは、人生途上で偶然の出会いから得た私の宝物であるから、めったなことでは人には告げずひとり胸中深くに秘め事としてしまい込んである。難事に出合った時、そっと知恵を授けてもらえる人たちである。私は、自分にとって大切にしたい人たちを勝手に選んで私のパンドラの箱に分身を仕舞い込ませてもらっている。

だから、私は生きる羅針盤となる人との「出会い」は、大切なものだと思っている。情報化社会のなかで暮らす現代人たちが、「いのちの電話」の相談のなかで人間関係がうまく結べないと嘆くことが多いいま、だからこそ、「出会い」の意味を改めて考えてみたいと思う。　（当協会　理事）